

【目的】受動喫煙が、周囲の非喫煙者の健康をも害することはよく知られている。そのため「健康増進法」により、公共施設での受動喫煙を防止する対策を講じることが求められている。松山大学においては、キャンパス内に喫煙スペースを設け、受動喫煙防止に努めている。本研究では、学生の受動喫煙に対する意識を調査し、喫煙防止教育の必要性について検討した。

【方法】2014年度に全学部（4学部、6学科）に在籍する学生を対象として学生生活実態調査が行われた。今回の調査では4,117名（全学生の72.1%）からアンケートを回収し、その調査項目の中から喫煙並びに受動喫煙に関するアンケート結果を使用した。統計解析には χ^2 検定を用い、 $p < 0.05$ 以下を有意差有とした。

【結果及び考察】 本学の全体の喫煙率は、9.8%で、男子学生が14.8%、女子学生が3.4%であった。また、学年が上がるとともに、喫煙率は高くなる傾向であった。次に非喫煙学生（3,507名）に対して、キャンパス内で「受動喫煙が気になるか」との質問において、「非常に気になる」「少し気になる」を併せると57.1%の学生が受動喫煙を気にしていることが伺えた。また、学部別では、薬学部が、「非常に気になる」「少し気になる」を併せると67.5%で最も高かった。男女で比較すると、男子学生が56.2%、女子学生が64.7%であり（ $p < 0.0001$ ）、女子学生で高い結果となった。

以上の結果から、全体として受動喫煙に対する意識は高く、今後の喫煙防止教育を進める重要な手がかりを与えるものと思われた。